http://ws.higo.ed.jp/jimuken/
平成２８年３月３１日 発行

熊事研会報

第118号
熊本県学校事務研究協議会
発 行 人　会　長　中村 光春
編集代表　事務局長　中村 勝美

目　次

1．退職者のメッセージ ……P. 1
2．平成27年度第22回全事研セミナー復講 ……P. 4

１．退職者のメッセージ

学校事務職員としての思い

熊事研会長　中村　光春

学校事務職員の皆様におかれましては、年度末を迎え忙しい日々をお過ごしのことと拝察致します。私は、やがて三十数年の学校事務職員生活が終わろうとしています。この間、様々な出来事がありました。「歴史は繰り返す。」と言います。今考えてみると、学校事務職員の抱える課題に関わって、現象面から見ると全く異なった事のように思っていた出来事が、よく考えてみると本質的には同じだったということが数多くあったように思います。そういった意味では、物事の現象面にとらわれず本質を見抜く目を持つ事の重要性と、それを育てる研修や学習の大切さを感じてきました。

私たちの世代の学校事務職員は、教壇に立たないということだけでの「義務教育費国庫負担制度からの事務職員・栄養職員の適用除外」との闘いの歴史であったといっても過言ではありません。

経験10年前後の若い方は知らないかもしれませんが、昭和59年旧大蔵省から 「義務教育費国庫負担制度から事務職員・栄養職員を除外」 する提起がなされて以降、 「義務教育費国庫負担制度適用堅持」 は学校、事務職員の切実かつ重要な課題となり今日に至っています。最終的には、平成16年度から教員給与の国立学校準拠制が廃止され都道府県が自由に給与を決定できるようになったことに伴い､給与単価と標準定数等に基づき算定した総額を都道府県に交付し、その枠内で、給与額や教職員配置については地方の裁量に委ねる「総額裁量制」を文部科学省が提案し了承されました。

この間、文部科学省、地方公共団体、教育関係諸団体は、「義務教育費国庫負担制度からの事務職員・栄養職員適用除外」反対で団結してきました。

私も職場等の沢山の署名を抱えて、大蔵省へ何度も行きました。また、それぞれの市や町で、毎年紹介議員をとおして議会請願を提出し、地方議会から国に対して「義務教育費国庫負担制度適用堅持」の意見書を提出してもらっていました。そういった中で、紹介議員や教育委員会と学校における事務職員の基幹的職員としての役割等について話すことは、今考えると重要なＰＲの場であったのではないかと思いますし、学校事務職員が団結していたように思います。今、こういったピンチをチャンスに変える発想こそが求められているのではないかと思います。そして、もしこの時に学校事務職員が義務教育費国庫負担制度から外れていたとしたら、すぐにアウトソーシングされて今の学校事務職員の存在自体が無かったと思います。

最近は、平成10年9月21日の中央教育審議会「今後の地方教育行政の在り方につい

て」以来、学校が抱える課題が多種多様で多岐にわたるため、今までの教員主導の学校経営では解決できないとして、学校事務職員への期待が高まっています。特に昨年の７月に出された「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」（中教審チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会中間まとめ）においては、学校のマネジメント機能の強化が必要であるとされています。その中で、①国は、事務職員の職務規定等を見直し、事務職員が、学校における総務・財務等の専門性等を生かし、学校運営に関わる職員であることについて法令上、明確化することを検討する。②国は、事務職員の標準的な職務内容を示すことを検討する。③学校事務体制の強化を図るための定数措置など、事務体制の一層の充実を図る、とされています。

政令市の給与費の税源移譲においても、全国各地で任用一本化が検討されています。熊本市も例外ではなく、給与や旅費についても、発生源入力方式や総務事務センター事務に移行すると考えられます。このことは熊本市だけの問題ではなく、各地区にも波及していくでしょう。その時、学校事務職員が学校運営に関わる基幹的職員であるためにはどういった仕事をしていくのか、今真剣に考えなければならない大切な時期であると思いますし、学校にいてこその学校事務職員という大前提は、変わることはないと思います。

最後に、熊事研と学校事務職員に明るい未来が来ますように、立場が変わっても微力ながら支援していきたいと思います。永い間、沢山の方にお世話になり、ここまで勤務することが出来ましたことに感謝致します。有難うございました。

長年のお勤め、たいへんお疲れさまでした。

退職を迎えて

熊本市立植木小学校　宮本和明

私の最初の赴任地は山鹿市立三岳小学校。１９７８年度採用は高校への採用も含めて６０名以上いたと思う。以来３８年間。平凡な中にも無事退職を迎えられるのは、学校という職場が基本的に民主的であり続けたこと、支えあった学校事務職員の仲間がいたことに尽きるのではないだろうか。年齢を重ねるごとに周囲への感謝の念が湧き出てくる。

私の学校事務職員としてのキャリアは初任から３年間をどう乗り切るかを考えることが出発点だったように思う。一人職種の悲哀と気楽さを持ちつつ、如何に学校という組織で生きていくかを自らが考えた３年間。そこにも、ともに考える仲間がいた。子どもたちとは友達のようによく遊んだ。今も数人とは交流がある。

郡市事務研を通して、マンツーマンで新しく地域に赴任した方の面倒を見ようとした次の数年間。「鹿本」という年配の先輩がほとんどおられない地域で独特の「仲間意識」が形成されていったように思う。同世代で悩みや喜びを共有しあった。「教職員のための基礎知識」を発行したのもこの時代。同じころ、郡市事務研の会長や県事務研の事務局員としての経験、財政研の仲間との交流も私の世界を広くさせてくれた。

３０代前半は広域交流で阿蘇へ。異動をすれば学校ごとに期待される職務内容が違うこと、市町村を変われば扱う財務内容が違うこと、等はわかっていたが、郡市の枠を超えると県費事務まで微妙に違うことへの驚き。根源は職務内容の確立にあると強く感じた時代。

そこにもすばらしい仲間が待っていた。学校内では、模擬授業へ参加し研究内容をともに語り合い、遊びだけではなく児童生徒と真剣に向き合うようになったのもこの時期からだったように思う。

３０代後半から４０代前半は、子羊の会と出会い、よく学びよく遊んだ。また、小学校から中学校へと勤務先が変わるころ、ある組織の長として全県の仲間と語らい若い人たちとよく遊んだ。「学校事務って何だろう」は底辺に流れるテーマだった。学校内では今の言葉で言う「チーム学校」や「学校をマネジメントする」を強く学んだ時期でもある。同時に教育委員会とともに予算を考えた時期でもある。

４０代後半から５０代半ばは、「小さい学校における小さな実践」と題して県事務研で発表させていただいたように、校舎改築へのかかわりや地域連携の見直し、教育委員会との関係改善、共同実施を通して職務を再度見直す時期で、ともに考え行動する仲間がいた。他方では自分の住む地域で地域おこしの真似事をやった。「月と音楽の夕べ」「ちょっとボランティアとバーベキュー大会」「芋掘り大会」など地域の有志で子ども達や住民を巻き込んで地域を考える活動をするのが楽しかった。

そして５０代後半。県事務研の会長として、九州地区の世話役として、全国大会実行委員長として貴重な経験となる６年間を過ごさせていただいた。最後に熊本県内の事務職員が一体となって全国大会が開催できたことは、私たちにとっても一つの節目となる出来事だった。全国を体感できたこと。大会最終日に「仲間に感謝、家族に感謝、そして自らに拍手」とお話したようにみんなで繋がることができたこと。また一人ひとりが、誰かの手足でなく一人の人間として考え行動したこと。私個人としては大会の成功をみんなで掴み取ったと実感できたことに感謝しかない。

各時代を羅列するだけで妙に感傷的になる。今は亡き仲間たち。次のステージへと進まれた先輩方。今まさに活躍の時代を迎えた身近な後輩たち。次世代を担う優れものの若い後輩たち。たったこれだけの原稿なのに、行間に去来する出来事を思い、仲間たちとの交流を思い、自らの職業人生に思いを馳せる。私はその人たちの心に何かを残せただろうか、それでも私は皆さんのことを忘れないと、一人ひとりと心の会話をしながら書き進めた。こんな文章で恥ずかしいが、お礼の気持ちを込めて、そのまま読んでいただく事にした。

最後に後輩の皆様にエールを送りたい。今、学校事務職員制度そのものがゆれている。

しかし、いつの時代でも大小の危機はあった。一つ一つ諸先輩たちが乗り越えてきた。今回も皆さんであればきっと乗り越えられる。私は学校事務職員が学校事務職員であり続けるためには、学校に立脚点があること。学校現場からの発想で教育行政や財政と話ができること。子ども達の視点、そこに働く教職員の視点、その学校がある地域･保護者の視点に立つことではないだろうか、と思ってきた。皆さんに押し付ける気は毛頭ない。変えてはいけないものは何か、変えなければいけないものは何か。まず自分の考えを持とう。その上でみんなと話し合い、一致点を探る努力を惜しまないでいただきたい。一致点を見出したところから行動に移してほしい。その先に未来がある。

一人の百歩はすばらしい。そして百人の一歩もすばらしい。違いを乗り越え、ともに手を携えて未来に向けて歩んでほしい。学校事務職員が本気になって、ベクトルをそろえて行動できたとき、学校が変わる。子どもたちの未来が変わる。私たちの仕事は実に面白い。

退職してしまう一事務職員のたわごと、感傷的な文書を最後までお読みいただき感謝しています。そんな私ですが、お読みいただいた皆さんに、私の愛した学校事務職員に対し、こころからのエールを送らせていただいて退職を迎えてのご挨拶とさせていただきます。今後は一市民として学校事務職員の応援団であり続けたいと思います。

３８年間ほんとうにありがとうございました。

長年のお勤め、たいへんお疲れさまでした。

平成２７年度第２２回全事研セミナーに参加して

八代市立千丁中学校　　後藤　義一

１．はじめに

今回学校事務職員として採用されて以来初めて参加しました。夏の全国大会には今年度の熊本大会を含め４回参加していましたが、退職するまでに１度は参加したかったセミナーに参加することが出来ました。そして当日の朝、ちょっとしたトラブルがありました。東京駅から京浜東北線で北とぴあに向かう途中、東京駅の線路に人が転落しその影響で約１０分電車が止まってしまいました。セミナーの日程も若干変更があり、前半部分を聞き逃してしまいました。そうした事情も踏まえて、「文部科学省行政説明」「講義Ⅰ」「講義Ⅱ」の内容を中心に復講していきたいと思います。

２．「文部科学省行政説明」

講師　文部科学省初等中等教育局財務課　財務課長　矢野和彦　氏

“チーム学校”という言葉を最近よく耳にします。教員は、児童・生徒への指導に専念し、子どもと向き合う時間を増やす。教諭、養護教諭、栄養教諭・学校栄養職員、事務職員等の教職員に加えて、専門的知識を有するスタッフを配置し、→それぞれの専門性を活かしながら、学校がチームとして教育力を発揮する。専門スタッフとは、スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー、特別支援教育支援員、学校司書、看護師等があります。

研究紀要には学校事務職員の役割の一つとして、給食費会計と書いてありました。個人的な考えですが、学校事務職員＝お金（集金や支払い）というのが、世間一般の見方ではないかと思います。学校事務職員＝お金以外の分野でも教員の支援として出来ることはないか、自分なりに今後検討していきたいです。

その他教職員定数について、現在議論されている内容の説明がありました。

疑問１・・・教員の数が増えれば、いじめや不登校は解決できるのか。
疑問２・・・教員の数が増えれば、学力は向上するのか
疑問３・・・教員の数が増えれば、教員の多忙感は解消されるのか

文部科学省と財務省、それぞれの考え・主張についての話がありましたが、個人的に印象に残った言葉は、「教職員の定数増による予算は、借金ではなく投資である」「高齢化社会に向けて力を入れるのは教育しかない」というものでした。自分自身、今後の日常業務を進める中で常に念頭に置いておく必要があると感じました。

また、日本の学校では職員全体のうち教員が占める割合が８割を超えていますが、（そうした状況が当たり前の思えている）アメリカでは教員の割合が５６％（それ以外の専門スタッフが４４％）、イギリスでは４９％（それ以外の専門のスタッフが５１％）との調査結果が紹介されました。

その後の説明では、教員以外の専門スタッフを増員することで、いじめや不登校の改善率が向上した事例や、少人数学級の効果（学級の安定化・学習習慣等の定着・学力の向上）が紹介されました。（長崎県・山口県・千葉県・横浜市）

今後こうした動きがさらに広まっていくのか、また私たち学校事務職員を取りまく環境にも影響が出てくるのか、学校事務職員ひとりひとりが状況の変化を理解し対応する能力を身につけておく事が必要だと感じました。

３．講義Ⅰ「学校のガバナンス改革の現状と課題～事務職員に求められる役割とは」
講師　千葉大学教育学部　教授　天笠　茂　氏
講義Ⅱ「企業の取り組みから学ぶ学校のガバナンス改革～学校事務職員の目標・機能を考える～」
講師　ベネッセ教育総合研究所　副所長　木村　治生　氏

上記の２つの講義も、これからの学校現場において学校事務職員が果たすべき役割や、求められる役割について、大学教授・民間企業とそれぞれの立場からの講話がありました。共通して言われたことは、学校事務職員の学校経営の積極的な参画でした。積極的な参画ということは・・・事務職員は学校運営事務に関する専門性を有している、ほぼ唯一の職員である。教育委員会によっては、学校組織マネジメントを効率的・効果的に行うための学校経営職員として位置づけ、総務・財務等に関する学校事務以外の職務（地域連携や学校評価、危機管理等）にも学校事務職員が関わっている例も見られる。

今後事務職員には、その専門性を生かしつつ、より広い視点にたって副校長・教頭とともに校長の学校経営をサポートする学校運営チームの一員としての役割を果たすことが期待される。

そのためには、校長の学校教育目標を理解し目標達成のためにモノやカネをどのように運用していくのか、私たち学校事務職員の工夫とスキルが試される時代が来ているとあらためて認識しました。

４．おわりに

その他、希望参加の昼食会があり他県の事務の先生とそれぞれの研究大会の様子や配分予算の状況等、情報交換が出来とても有意義でした。今回、全事研セミナーに参加してこれからの学校事務職員はどうあるべきなのか、あらためて認識出来るよい勉強になりました。学校現場での主役は間違いなく児童生徒です。こうした学習も最終的には児童生徒によりよい学習環境を提供するためではないでしょうか。個人的な思いですが、生徒に対する愛着がなくなった時は、学校事務職員を辞める時だとずっと心に決めています。未来を担う児童生徒のために、日々の事務処理や、状況の変化に対応出来るだけの能力向上に必要な学習を怠ってはいけない（労力を惜しまない）。今後とも初心を忘れず頑張っていこうと思います。

熊事研ホームページ
http://ws.higo.ed.jp/jimuken/